

＜我－汝＞の現象学とその応用 超越論的コミュニケーション

自己（超越論的自我）は コミュニケーションに使えるか

なぜ雑談がひきこもり支援を可能にするのか？

常葉大学 経営学部経営学科4年 大石由佳

目次

- ・ 研究の背景と目的
- ・ 先行研究（現象学）
- ・ 研究内容（実存的構造）
- ・ 考察と結論

背景

社会課題のひとつ 8050（はちまるごうまる）問題

- 80代の親が50代のひきこもりの子供の生活を支えること。1980年代から90年代までではひきこもりは若者の問題とされてきたが、さらに彼らが回復せず高年齢化することで、現在親子共に困窮する状態になるという事例が発生している。
- 日本全体ではひきこもりの人数が100万人を超えており、特に就職氷河期2002年あたりで急増していた。内閣府の調査（H30）
- 特に家族の理解と配慮により治療が大幅に進むとされ、ひきこもりの両親間および家族全体の関係改善が必要不可欠である。信頼関係を結ぶためには相互のコミュニケーションが関わってくるが、依然乏しいためひきこもりが長期化する要因にもなっている。

研究の背景と目的	先行研究(現象学)	実存的構造	考察と結論
----------	-----------	-------	-------

ひきこもりへの心理学的アプローチ

「目的や結論のない対話」が支援の糸口であり、クライアントの自発性や自主性を促すことでひきこもり支援が達成される。斎藤環（2020）

対話	対話にならない会話
なんでもないお喋りのこと 主観性の交換	議論、説得、押しつけ、懇願、命令、アドバイス、尋問、ダメ出し
特徴	特徴
<ul style="list-style-type: none">のんきで、ささいで、くだらなくて、すぐに忘れてしまいそうな、そんな話題であること対等であること安心・安全であること(できれば)3人以上であること時間を掛けて、声を出して、たくさん喋ること話をしっかり聴き応答すること主観的な感想をつたえあうこと「対話のための対話」であり、その目的は「対話を続けること」	<ul style="list-style-type: none">「相手がまちがっている」ことが前提となっていること対話を持ち掛ける側に結論があり、それを押し付けることが目的であること

→ただし、なぜ自発性等が回復するのかという点では定かでない。
前提となるひきこもり患者には自発性等がないことについては懐疑的である。

類似の対人支援方法

・ オープンダイアローグ

「統合失調症のケア手法」として発展してきたフィンランド発祥の入院や薬剤を使用しない精神科医療法アプローチである。方法として、初回の連絡があったときから 24 時間以内に治療チームを立ち上げ、治療チーム（2～3 人）とクライアントのチーム（本人、家族、関係者）を部屋に招き入れ「開かれた対話」を行う。対話は状態が改善されるまで基本的には毎日行われる。

・ ユマニチュード

知覚、感情、言語による包括的コミュニケーションにもとづく認知症ケアの技法。イブ・ジネスト、ロゼット・マレスコッティらによって作り出された。「見る」「話す」「触れる」「立つ」の 4 つを柱に、相手のレベルにあったケアをする「人と人との関係性」に着目したケアである。

以上 2 つは対話を治療の中心に据えており、効果があると実証されている。患者本人とその家族（または医療関係者）の間に信頼関係を結ぶ必要があることが共通している。

研究の背景と目的	先行研究(現象学)	実存的構造	考察と結論
----------	-----------	-------	-------

目的

雑談がひきこもり患者の自主性や自発性を育む理由を解き明かす

本研究の意義は現象学を経営学及び人間の営み（主にコミュニケーション）に役立てること

- I. 「現象学をコミュニケーションに応用すること」とは何か明らかにする
- II. 現象学を応用したコミュニケーションの実例とその有用性を確かめる

方法

- 文献とインターネットによる情報収集

研究の背景と目的	先行研究(現象学)	実存的構造	考察と結論
----------	-----------	-------	-------

現象学について

- 1) CiNii で「現象学」をキーワード検索してみると、論文数は123件／年
- 2) 20世紀初頭のドイツで Husserl によって創始された哲学であり、今日の対人支援領域では質的研究法の一つとして位置づけられる
- 3) 応用範囲は哲学，教育学，看護学，医学，芸術，社会福祉学，リハビリテーション学，言語学と続く．その他には体育学，国際協力，情報学，観光学等が含まれる

研究に現象学を用いるとは、物や出来事を人間にとっての経験の次元から考察するものである。
植田嘉好子（2018）

研究の背景と目的	先行研究(現象学)	実存的構造	考察と結論
----------	-----------	-------	-------

現象学の始まり

認識問題(根本問題)

産業革命の後の近代哲学では「ありのままの現実世界を正しく認識できるか」を考え続けられ、「客観＝主観」を成り立たせると世界を正しく認識できたと言えると考えられた。

→このような認識問題に対して唯一解法が得られたと言えるものがフッサールの現象学である。

自然主義的態度

自然科学分野の実証主義的な研究方法を支える考え方。客観と主観を前提に人の数だけある主観から見た物事よりも、客観的にみた物事の方が正しい認識であり真実であるとする。



現象学的態度

「客観」は真理ではなく、自分で感じて体験すること自体が生の意味であると捉える。現象学的還元（一旦＜客観－主観＞の考え方を取り払い経験の確信を紐解き「内在」単位の意識に立ち戻ること）に基づく。

「内在－超越」原理と還元

・ 「内在－超越」 原理

	意味	例
t ↓ <div>内在</div>	「原的な体験」、 認識の最小単位 、受け取った今の様子、生の経験、知覚そのもの	意識に直接与えられた知覚 「いい香りのする、黒いものが見える」体験
<div>超越</div>	上記から構成された事象経験、言葉で表せること	経験の確信 「ひとつのコーヒーがある。」
		「あれはコーヒーゼリーだったかもしれない。」と思う

超越はどこまでも疑える

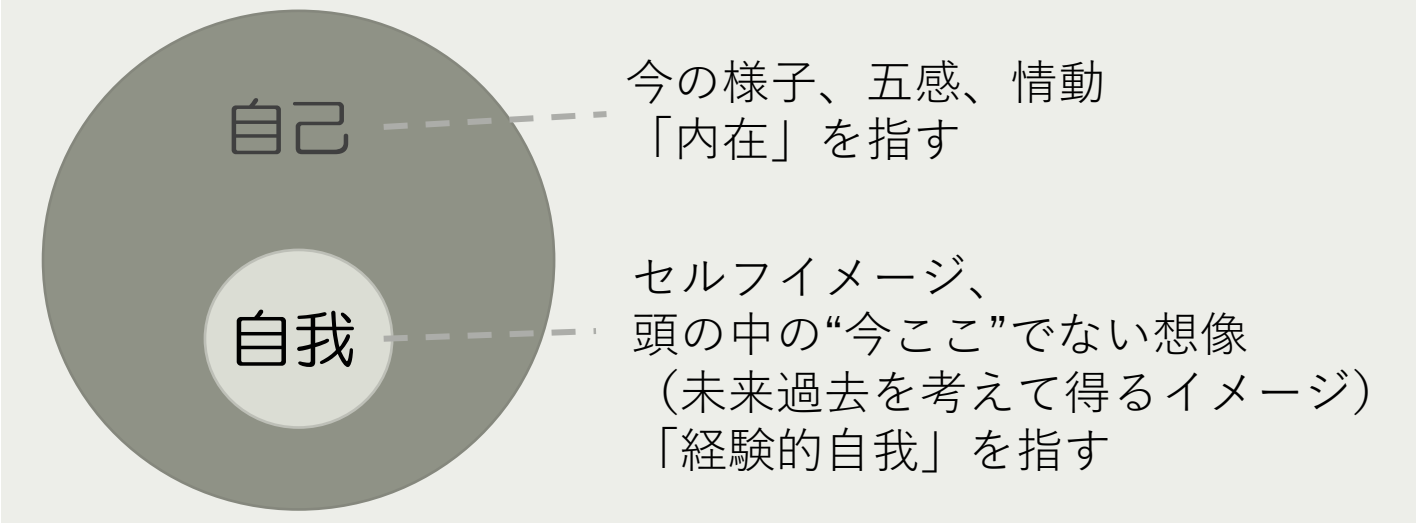
→ 内在で知覚したことは、意識上で最も確かなこととなる

・ 還元

<還元>とは要するに、今見たような「自然的世界像」のうちに暗々裏に含まれている素朴な確信をすべて「疑って」みることを意味する。竹田青嗣（1989）

人間構造

人は、今の瞬間を体験(自己)しながらそれを思考している自分(自我)がいる

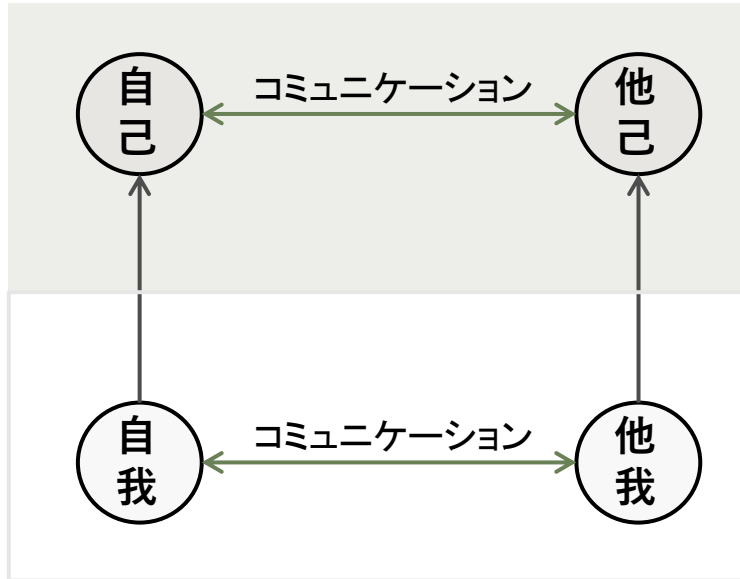


人が意識のある時
自己は常に働き、その上で自我が働く
ex.スマホのOSとアプリケーションの関係

	非選択的	選択的
自我	経験的自我	超越的 自我作用
自己	非選択的自己	超越論的自我

- ex. 「他人から見える私の姿」はセルフイメージ
他人の目を活用してファッションを楽しむ
⇒**選択的自我** (超越的自我作用)
- ex. それ (能動的に使おうとすること) 自体を忘れること
ありのままであろうとせずにありのままでいること
⇒**選択的自己** (超越論的自我)

実存的構造



本研究では人間の構造を2つの概念に分けて捉えた。

- ・ 自己＝今の様子を指し、「内在」の概念にあたる
- ・ 自我＝セルフイメージ、「経験的自我」と同意である

加えて他者に構造を当てはめると、4極となる。

- ・ 他己＝他者存在自体
- ・ 他我＝他者の自我のこと

<自己-他己>主体の対話

- ・ 何かしらの役割や責務を大きく加味せずに今の様子を受け入れて話すこと
- ・ 自我を離れて本音の状態になること
- ・ 五感の情報を取り上げて話をすること

従来の<自我-他我>間のコミュニケーションに加えて<自己-他己>の水準(次元)を加えたコミュニケーション
→「超越論的コミュニケーション」とする

現象学や実存的構造の有用性

改めて現象学を捉えなおして、自己を始めとする潜在的な自分を含めた人間を捉えることによって、ホリスティック（全体的）なアプローチが開かれる。

特に医療分野では現象学的に人を扱う対人支援として、従来のケア手法や療法ではカバーしきれない点を補い治療の質の向上を促している。

- ・ 例 フランクルのロゴセラピー

心理療法。自らの「生の意味」を発見する援助をして心的病を治す。

↑ 科学的でないという批判があるが、現象学的態度では同じ状況下が起こる（作れる）とは考えないため、自然主義的態度の再現性とは対立してしまう。

考察

超越論的コミュニケーション＝雑談＝「目的や結論のない対話」

- 相互コミュニケーションが乏しいひきこもりとその家族の現状は、〈自我-他我〉水準のみで関係や会話が完結していると考えられる。
- 支援に限らず雑談はありのままで本音や五感の情報を取り上げて話をするような特に何でもない対話である。そこには〈自我-他我〉の「考え方」が介入しづらい。
- 外出や就労前提の一方的な声かけでなく、個人対個人の対話をする中でひきこもりと家族間の会話や関係にて、これまで無意識化されていた〈自己-他己〉が顕在化されることが考えられる。

ひきこもり支援方法の「目的や結論のない対話」（雑談）は超越論的コミュニケーションにあたり、盲点となっていた現象学的視点（今の様子）を促す効果がある。そこから今までは異なった生活体験が可能となる。

結論

「現象学をコミュニケーションに応用すること」とは何か明らかにする

→人間構造を自己と自我、他己、他我の4つと捉えたとき、＜自我－他我＞を「超越」して本当の関係に基づく対話をするということ。以上を超越論的コミュニケーションとする。

現象学を応用したコミュニケーションの実例とその有用性を確かめる

→ひきこもり支援における「目的や結論のない対話」（雑談）がこれにあたり、治療効果がある。

雑談がひきこもり患者の自主性や自発性を育む理由を解き明かす

→自主性を育む以前に、有無について断定できない。それに限らずとも、雑談（対話）が無意識下にある自己と他己を顕在化させる働きを持つため、雑談は現象学的視点から見ても支援に有効であるといえる。

参考文献

- ・ 福田鈴子 砂子岳彦 木花さつき (2017)、『人の「在り方」とコミュニケーション』
- ・ 竹田青嗣 (1989)、『現象学入門』、NHK出版
- ・ 竹田青嗣 (2012)、『はじめてのフッサール「現象学の理念」』、講談社
- ・ 斎藤環 (2011)、『「社会的うつ病」の治し方』、新潮社
- ・ 斎藤環 (2007)、『ひきこもりはなぜ「治る」のか?』、中央法規出版
- ・ 本田美和子 イブ・ジネスト ロゼット・マレスコッティ (2014)、『ユマニチュード入門』、医学書院
- ・ 「8050問題」とは? 求められる多様な支援 - 記事 | NHK ハートネット
- ・ 「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」
- ・ 斎藤環: 「開かれた対話」と「人薬」 (第31 回神戸大会アーカイブ) . 家族療法研究
- ・ コロナの向こう側で (2) “会話”よりも“対話”を 斎藤環さん - 記事 | NHK ハートネット
- ・ ひきこもり支援者のための実践的な知識や制度等の解説
- ・ 植田嘉好子 (2018)、「対人支援領域による現象学的研究の動向と展望」